

無医村への経験が支えに ～中野診療所の55年間の歩み～

丸岡において55年に渡って中野診療所の院長を勤められた中野明先生のご自宅に伺いました。先生は大正 10 年に羽崎の藤田家の三男としてお生まれになりました。5 年前から一人暮らしですが、張りのある声で、昔を懐かしむように丁寧にお話して下さいました。



先生の医師としての歩みを
お聞かせください。

昭和十八年九月に京都府立医大を卒業し、一ヶ月後には軍医候補生として入隊のため遼陽(りょうよう)へ渡った。二ヶ月間兵科の訓練を受けた後、奉天の陸軍病院へ軍医中尉として赴任した。辛かったのはソ連に占領されていた時期でした。

昭和二十一年六月に引き揚げ、母校の神経精神科へ戻ったが空白の日々が続き諦めて帰ってきました。心機一転し、福井の日赤小児科の診療見学に通った。

父親の勧めで金沢大学の外科に移った昭和二十三年、福井地震で病院は全焼し、翌年丸岡へ戻り父親を手伝うようになった。そのころ父親は内科、外科、産婦人科をしていたので、私も往診やお産の手伝いなどしていたが何か医者として物足りなさを感じて

いたんだね。

昭和二十六年三月に無医村だった岩手県南端の人口六千人の永井村へ家内と三人の子供を連れ、その診療所に住み込みました。

村での生活はとても大変だったがやりがいのある充実したものでした。二年足らずで神奈川の無医村へ移りましたが、父親が合併初代の町長になり、息子を呼び戻すことが選挙の公約になっていたら



中野 明院長

しく、昭和三十年五月に丸岡に戻り病院を継いだのです。五十五年間、毎日心から休むという日はなかった。夜中の往診はもちろん元旦から検死に行ったこともあったが、辛いと思ったことはなかったね。それというのも岩手での体験があったからだと思

診療のかたわら町の監査役

や青少年育成推進会初代会長など町政に参画され、牧野氏の後援会長や町制百周年記念事業実行委員長もされました。

百周年事業の時は、ちょうど昭和天皇が亡くなり平成に変わった年で、我々戦争に征つた者にとつて昭和というのは特別なものであり、その昭和が終わったというのは非常に寂しく辛いものでした。そんな時に記念事業に首を突っ込むのは苦しかったが、若い人たちに助けられてやり遂げることができました。

閉院された今のご心境をお聞かせ下さい。

この度、九月いっぱい診療を終わりに、今は時計を気にしないで自炊をしたり、庭いじりをしたり暇なことはありません。京都で医者をして長男にも診療をやめたことを言っただけではない。自分は養子で親の言う通り戻って跡を継いだ、息子には好きな道を行って欲しい。

いざれ読もうと買った本が山ほどあるし整理したいことも沢山あるが、歳をとったせいか物事に集中することが難しくなつてねえあちこち摘ま

み食いですわ(笑)。
平成元年のバイスクル
フェスタ記念誌に会長あいさつ文と詩を載せておられます

文は新日本海時代の期待を込め、詩は竹田への往診など思い描き一晩徹夜で書き上げました。

風と土と銀の花と

表二ホンに対し裏二ホンと言うそんな古い差別が陰鬱に語られていた。裏側に住む者の中物心ついで、引け目を感じないで育った人が曾て一人だつてあつたらうか。やがて新幹線が走り表側に追いつき追いつき縋ろうと焦つた長い日々が昭和と俱におわつた。挫折し、模索し、生き残つた者の末裔が不死鳥のように甦つて、いま日本海の新世紀を翔んでいる。

風を切り

土の香を呼吸しながら
川に沿い 山を縫い
野や里や 古城の町を
輪と輪と 銀の花を連れて
明日を走りつづける
バイスクル バイスクル
バイスクルフェスタ 万歳



丸岡の自転車競走